

『大乗四論玄義』逸文の整理

伊藤 隆寿

一 はじめに

本書は、吉藏と同門である慧均（均正）の著作であるが、その伝承構成等については前に述べたごとく、⁽¹⁾ 我国においては天平十二年（七四〇）に最初の書写がなされている。それ以来、吉藏の著書と共に依用研究されたが、三論宗の研究講説の中心は、何と言つても吉藏

の著述を以つてなされ、吉藏は宗家として崇敬されている。したがつて、慧均には本書の外にも著書があつたごとくではあるが、流布し伝えられたものは本書が唯一であり、本書は、吉藏の教学、所論を理解する参考資料として用いられたようである。よつて、鎌倉新仏教の成立以後、いわゆる南都八宗等の古宗の衰微と共に、本書の伝承は不明確となつて、江戸時代に至ると、本書の存在あるいは伝持はごく一部の人々に限られたようである。それを物語るごとく、現在完本として伝えられたものはなく、続蔵本は量的に本来の半分に過ぎず、構成もかなり混乱したものとなつてゐる。

しかるに本書の内容は、吉藏と近似した説相を示しているものの、明確な相違点も指摘され、客観的みるとなるならば、一つの重要な資料を提供するもので、三論宗の教學のみならず、中国南北朝から初唐における仏教の歴史的教學學説の記述においては、吉藏の著者に

(1) 拙稿「大乗四論玄義の構成と基本的立場」（本論集第二号、昭和四十六年）

(2) 『東域傳灯目録』によれば、『弥勒經』の遊意である「上下両經遊意」一卷。（拙稿「弥勒經遊意の疑問点」本論集第四号参照）を伝え、自身の言及によれば、『涅槃經』『大品經』に対する註疏があつたごとくである。

(3) 平井俊栄「吉藏と中坂および中坂師」（印度學仏教學研究第二十二卷第二号、昭和四十九年三月）参照。

は見られぬ多くの事柄を含んでおり、軽視出来ぬものがある。しかし、その半ば以上が散佚に帰していることは、我々に取っては非常に残念なことであるが、幸い、我国三論宗の諸注釈書には、多くの引用が見られ、しかも、その多くは現在散佚している部分であるだけに、資料的価値は充分認められ得ると思う。本稿では、それらの逸文を抜出整理して、今後の研究に資せんとするものである。

二 閲覧資料

我国における三論研究は、奈良平安時代は、元興寺、大安寺、西大寺等を中心としてなされ、後室町時代中期頃までは東大寺の東南院、洛西広隆寺の桂宮院を中心として盛んに講説が続けられ⁽⁴⁾、主として吉藏の著述に対する注釈書や講説論義の筆録等、かなりの資料が伝えられている。江戸時代になると、伝統的な講説研究の姿はなくなり、新たに加えられたのは『三論玄義』に対する注釈のみで、他は從来の文献の筆写がなされたに過ぎぬごとくである。⁽⁵⁾

今回閲覧した資料もすべて室町時代末期までに成立したもので、年代順に列挙すると次のごとくである。○で囲んだ文献が、本書を引用している。

1 浄名玄論略述 五卷(欠有) 智光(七〇八~七八〇)

2 般若心經述義 一卷 同

3 中論疏記 十卷(欠有) 安澄(八〇一~八〇六)

4 大乘三論大義鈔 四卷 玄叡(七八四〇)

5 一乗仮性慧日抄 一卷 円宗(七八六五)

6 大乗法門章 四卷(欠有) 願曉(七八七四)

7 三論玄疏文義要 十卷 珍海(一〇九二~一一五二)

(4) 日本三論宗の人脈、研究状況等は、改めて検討したいと考えているが、元興寺には、日本初伝の慧灌、第二伝の智藏、及び智光、願曉、隆海等があり、大安寺には、道慈、善議、安澄等、西大寺には、実敏、玄叡等。また東南院は、願曉の弟子聖宝の建立とされ、觀理等代々三論の本拠として三論学者が排出する。桂宮院は、その当初より三論を専ら講説し、澄禪、貞海等が住し、鎌倉、室町時代隆盛を極めたごとくである。

(5) 江戸時代における『三論玄義』の註釈者として、尊祐、聞証、鳳譚、庸性が代表される。

- | | | |
|-------------|-----|---------------|
| ⑧三論名教抄 | 十五卷 | 珍海 |
| ⑨大乗玄問答 | 十二卷 | 同 |
| ⑩大乗正觀略私記 | 一卷 | 同 |
| 11一乘義私記 | 一卷 | 同 |
| 12玄疏問答 | 三卷 | 賴超（一一八四） |
| 13三論祖師伝集 | 三卷 | （一一〇四~） |
| 14三論玄義檢幽集 | 七卷 | 澄禪（一二八〇） |
| 15大乗玄聞思記 | 一卷 | 藏海（一二八七） |
| 16十二門論疏聞思記 | 一卷 | 同（一二九一） |
| 17三論興縁 | 一卷 | 聖守（一二一八~一二九一） |
| 18三論真如縁起事 | 一卷 | 慈光（一三二六） |
| 19三論玄義鈔 | 三卷 | 貞海（一三四一） |
| 20三論玄義肝要抄 | 五卷 | 亡名（一三四九） |
| 21八幡宮勸學講問答抄 | 二卷 | （一四〇〇~?） |
| 22三論祖師伝 | 一卷 | （一四九一~） |
- テキストは大正蔵（略号大正）を主とし、他は大日本佛教全書（仏全）、日本大藏經（日大）所収本を用いた。ただし20の「肝要抄」のみは竜谷大学蔵の写本（竜大・No.2641-11）である。これは著者不明の文献ではあるが、文中、貞和五年（一三四九）に桂宮院の貞海に意見を乞うたことを記しており、また「講云」「貞公云」等と々に言及しているところから、⁽⁶⁾貞海門下の一人によつて著わされたものと考えられ、貞海講俊一記の19『三論玄義鈔』と同種の著作であるが、諸種の文献を参照し、私見を加うる等、資料的には俊一記に勝る。また『四論玄義』の引用に関して言えば、俊一記は「檢幽集」等の孫引の感があるが、こ

(6) 『肝要抄』上冊（七十左）「貞和五年三月二十一日。奉尋貞海大德之處。彼答趣同初義也」

の書は、直接引用したものと察せられる。以上列挙した外、『中論疏』『大乗玄論』『三論

玄義』等に対する講義録が写本として多数伝えられており、⁽⁷⁾さらに逸文を加え得ると思われる。

三 整理方法

上記の資料において、「四論玄云」等として、その文を引用しているものを悉く抜出し、続蔵本に存するものも含めて、諸資料の指示する巻数と章名(義科)に従つて整理配列した。巻数と所収内容に関しては、続蔵本と相違するが、続蔵本は、その底本 자체かなり錯綜欠文の多いもので、首尾の題目等も編纂の際に押入したものがほとんどで、原形態を留めていない。上記資料の引用は、一部の略抄や孫引を除いては忠実に記しており、完本を見た上での依用と考えられる。しかし、巻数と所収内容は原本と相応しているにしても、逸文各々の配列の順は、現行本所在の部分を除き、必ずしも一致していないであろう。また巻数不明のものは、最後に掲出した。引用文が現行本に存する場合、二資料以上に引かれる場合等、それを対照し、脚注にて異同を示した。脚注にて使用した略号は次の如くである。

(記)	——	中論疏記	(文)	——	三論玄疏文義要
(玄)	——	大乗玄問答	(略)	——	大乗正觀略私記
(疏)	——	玄疏問答	(檢)	——	三論玄義檢幽集
(聞)	——	大乘玄聞思記	(鈔)	——	三論玄義鈔
(肝)	——	三論玄義肝要抄	(祖)	——	三論祖師伝集
(続)	——	続蔵所収四論玄義	(大)	——	大正本大乗玄論八不義
(甲)	——	大正蔵の甲本			

(7) 「東大寺図書館蔵書目録」参照。

卷第一 初章中仮義

○不住之初即貫前後也。故大品經初明以不住法住般若中。終訖乎無所得。故閔中旧影云。

初章之義只是不住無得之語。其意包含。（中論疏記卷三末、大正六五・八九中）

○成論等明十二仮十一実法。此為有。十二仮者。四大五根衆生及井河也。十一實者。五塵

四無為及心無作也。（檢幽集卷四、大正七〇・四二四上）

○非有非無即両去。即是斷。而有而無両來。只是常。此是斷常二見。何謂中仮也。故一家

旧云。両去不名中。両來亦不成仮也。（中論疏記卷三末、大正六五・九〇上）

○興皇大師弁中仮亦無量。但要者。或開三種中。有時開四種中也。仮亦然也。三種者。一

者對偏中。二尽偏中。三者絕待中。四種者三如前。^⑤第四明成仮中也。對偏中者。如内学

稟仏二諦教則空有。成斷常二見。迷僻於中。如百論三外道中。亦如開善二諦義明三種

等。有所得家中故。論主說不生不滅中道。對破彼偏執。則為說正中義故對偏明中也。尽

偏中者。盡淨於偏。名之為盡淨中也。何者。明唯直弁中對偏而已。復須洗除此偏。盡淨

乃得名中。故言盡偏明中也。絕待中者。亦名實相中也。不從對偏為名。亦不從盡淨為

目。言語道斷心行処滅。四句五句所不可得。強稱嘆立中名。以顯正法實相義也。又中本

對偏。偏病既去。中亦不留。非偏非中。不知何以美之。強名為中。故名為絕待中也。

問。若絕中名為中。亦應絕待名為待耶。答。待不待絕不絕是一例。絕中無復中名為絕中。

絕待無復待名為絕待也。成仮中亦名接斷中也。成仮中者。絕本對不絕。不絕是仮。所以

第四明成仮中也。明中道實非有非無。因此非有非無得起有無。以中成仮。故名成仮中也。

仮於無名相中。仮名相說。說有無為顯非有非無。非有非無是中。因此中起仮也。接斷中

者。中偏既去謂絕斷。作解沈空。故接起仮名中故名接斷中也。此即治病中也。又藏公云。

論主破外道。外道心無所安。成斷見求覓法。論主將仏二諦接斷。亦得接斷二諦。是百論

① (甲) 慧とす。

② (肝) 卷五(下冊三五丁左)にも出
す。「…第四名成仮中也」まで引用。

③ (肝) 義且とす。

④ (肝) 欠

⑤ (肝) 先とす。
⑥ (肝) 欠

意也。中論直諍仏二諦。廻生滅心向無所得心故。不別二諦來接。故不名接斷。若生滅心去。無所得心接。不無此義也。問。接斷中之中。是能接為中。是所接為中耶。答。外人既被破心無所安。沈沒在空。仏正教有無二諦能接之。二諦為中亦得。又實相之中沒在。從所沒中為中亦得。正意強名中也。問⁽⁷⁾。四中之中有淺深不。答。正法中望對偏中與⁽⁸⁾尽偏之中。并尽與對者一正法。望二中為開二中者。即無淺深也。若對斷常偏仮名立為中。名對偏中。即此中能盡淨偏。故⁽⁹⁾盡偏中。偏即去中亦不留。非偏非中強名為中者。此中即深。前二中淺也。接斷中亦淺。又亦病非病也。成仮中者。有二義。若正法體中能立有無二諦仮。故名成仮中者。此中即深。若仮名為中者即淺也。實相中者。能所俱寂。即是正法中。若心既沈沒即病中也。仮亦有三四種。一者對性仮。二者尽性仮。三者因緣仮。四三如前。第四表理仮。亦得云接斷仮。第三是二諦攝也。（檢幽集卷七、大正七〇・四九二上一下）

○問。若一切衆生共行一道故無二者。經那云三乘各道耶。答。道未曾是三。但隨緣說三耳。如大經云。觀中道者有三種。下智觀者。得聲聞菩提。中智觀者。得緣覺菩提。上智觀者。得仮無上菩提。此是同觀一中道。而得悟自有淺深。菩提未曾多種。亦如十地。正道未曾十。但約三義說十地階差不同。（檢幽集卷七、大正七〇・四九〇下）

○問。中以何為義。答。中以實為義。亦言中以正為義。以正釈中。以實釈中也。問。如斯釈出何典語耶。答。略出三証併以理明之。何者。一者闡中。二者論文。三者引証也。闡中者。叡法師序中論意云。以中為名照其實也。此是以實釈中。中是實義也。問。照其實者。似釈觀義耶。答。照是顯義。顯其實錄也。⁽¹²⁾又肇法師作涅槃論云。如正觀論中說。故以正釈中。中是正義也。論文者。論觀法品云。諸法實相云何入。答云。息我我所諸見故得入實相。實相是中故。以實觀中。中是實義也。又大論至難處。指云如正觀論中說也。引証者。大經云。無相之相乃名實相。如是無相亦名第一義空。亦名中道也。以理明之者。中是中實故以實為義也。（檢幽集卷七、大正七〇・四八六下—四八七上）

⑦(肝)「……前二中淺也」まで引用。
⑧(肝)之中欠
⑨(肝)之を加う。
⑩(肝)者を加う。
⑪(肝)名を加う。

⑫(聞)(日大、三論章疏一、一三〇中一一三一上)「……中是正義也」まで同文引用。

○問。緣發於觀。觀發於緣。緣尽於觀。觀盡於緣。此是何言耶。答。緣有二種。若能所之緣。此是境智。明境智相稱因緣相發義也。若顛倒之緣。此緣亦發菩薩正觀。然此兩種緣發義雖同而有疎密之殊。前是密論相發。後是疎弁相發也。（檢幽集卷七、大正七〇・四八四中）

○一家云。亦得言体用中仮。亦不得。爾言得者。如八不義中記。言不得者。以体明不二故不論仮。而名為中。用論二。二用無窮。故是仮也。（中論疏記卷三末、大正六五・八七中）

○相待門者。如待有故無。未待有無有一無。未待無時無別一有。亦非是有故無。一有將以形無非有。一無將以待無故。只是待有故無。無故有。有是空有。無是有無。故無有一相。是不二義也。問。既云相待。寧言不二乎。答。一家多勢。若是一種門只是相即。是不二義。只因緣相待只是一因緣義。故是不二然也。又相待寧非是二乎。設作問者。說空非色。說色非空。唯指空為色指色為空。故是不二。既言空作色。寧非不二乎。具如二諦義中說也。（真如緣起、日大、三論章疏一、七六四下）

○所言疎密者。由中仮而生也。但須知此起意。何意作此疎密之義者。栖霞寺大朗法師。^⑬止觀詮法師。^⑯興皇朗法師。三代四論師中。疎密橫豎雙隻單複義宗起也。攝山栖霞寺大朗法師云。長安融法師注維摩中云。什法師云。若不識橫豎疎密雙隻單複義者。終是不解大乘經論意。故止觀法師云。大經云。鬼非鬼非非鬼等。如大品經相行品云。行亦不受。不行亦不受。行不行亦不受。非行非不行亦不受。不受亦不受等。

○明由空故有。由有故空。此語為疎。若空不空。若有不有。此語為密。此則漸進之義也。問。何空有為疎。不有有不空空為密耶。答。空有兩法相由。由空故說有。因有故說空。此則為疎。若不有有不無無。只於一法上更起。故為密也。（檢幽集卷七、大正七〇・四九三

上十一中）

○仞性非因非果。非因而因。因有二。一境界因。二緣因。非果而果。果二種。一果三菩提。

^⑯ 「四論玄第一初章中仮義云」として

引くもあるいは仞性義の趣意か。続

^⑬ (記) 卷一本 (大六五・二三中) 三
師の名引用。

^⑭ (記) 寺欠
^⑮ (記) 法朗とす。

二果果則大涅槃。今不論二果但明二因。一境界因則二諦。二緣因則二智。（檢幽集卷七、大正七〇・四八四中）

藏所收仏性義には次の如く記す。「不

二而二。故非因而因。因有二。一境

界因即是二諦。二了因即是觀智。觀

智即是般若。般若即是二智。非果而

果。果有別總。總而名別為菩提果。

別而用總涅槃為果果」（正統、一、七

四、一五〇左下—五一右上）

卷第二 八不義

○成實師解八不不同。一云。八不並是真諦中道。亦是真諦。^③二云。不生不滅是中道。即是

真諦不有不無中道。余六不是俗諦中道。（檢幽集卷七、大正七〇・四九五上）

○此則第一善惡相對。惡是墮墮。乖理無有出功。故十惡為戲論也。善是清昇。扶理有出之義。故十善非是戲論。^⑪
○此即第二有相無相對。是分別為戲論也。無相即無分別。為非戲論。亦云漏無漏相對。謂^⑯有漏之善。但得三有果報。不能出生死。^⑰止是不動不出。故名戲論。無漏之善。破裂生死。故不名戲論也。

○是第三一異相對。謂上雖言有相是戲論。無相非戲論。若見有相異無相者。是戲論也。^㉑見相無相不異。乃名非戲論。乃至善之與惡。生死涅槃。凡聖解惑。万義並類也。（中論疏記卷二本、大正六五・二六下—二七上）
○故相伝云。中論是釈論之骨髓也。（玄疏問答卷二、日大、三論章疏一、六〇六上）

（鈔）卷下（大七〇・五三一上）同文。
（大）論
（大）也を加う。
（大）此則第の三字欠
（大）者を加う。
（大）欠
（大）此即第の三字欠
（大）者を加う。

（大）明之を加う。以下は「亦言有漏無漏相對也。有相是分別故為戲論。無相即無分別故非戲論。」（大四五・二九下）
（大）此即第の三字欠
（大）者を加う。
（大）明之を加う。以下は「亦言有漏無漏相對也。有相是分別故為戲論。無相即無分別故非戲論。」（大四五・二九下）
（大）此即第の三字欠
（大）者を加う。

（大）欠。またこの前に一七二字の説明あり。（大）唯
（大）離を加う。
（大）法
（大）是
（大）便
（大）欠
（大）之與の二字欠
（大）凡聖の二字欠
（大）万義を等とす。
（文）卷二（大七〇・二二二中）（略）
(大七〇・一七九中) 同文。

卷第三 二諦義

○安字釈者。真以實為義。即有之無。體無虛偽故稱為真諦。第一義理極莫過。謂之第一。旨趣實爾故稱義。俗者以虛為義。有非性實。賴衆緣成無自故俗稱。世者以有隔別。名相不同。故曰世也。（檢幽集卷七、大正七〇・四八五下）

○若以義釈名有三種勢。一橫論顯發。二堅論表理。三當體釈名。（肝要抄卷五、下冊三二丁左）

○堅論表理者。真是不真為義。俗是不俗為義。故居士經云。五受陰洞達空是苦義。諸法畢竟不生不滅是無常義。此即以非苦釈苦。不無常明無常也。大經聖行品云。知苦非苦。苦聖諦。知集非集。集聖諦等。故言堅論表理也。（檢幽集卷七、大正七〇・四八七下）

○^⑩一家意。說真為俗。說俗為真。說境為智。說智為境。說黑為白。說白為黑等。如空織羅空中織紋等。無有蹤跡。故大品經句義品云。如鳥飛空跡不可尋。（玄聞思記、日大、三論章疏一、一四〇上）

○^⑪成實師執兩家說二諦不同。廣州僧亮法師云。法本自無。因緣成諸。称之为俗。法本性無。

名之為真。終是二法。兩體不相闊。即失假名義。河涼顯亮法師云。因緣即體。不可得即空。即體不得之因緣因不空。此之二師。十五家中。初即第一名為假名空。次是第十二名為不空假名。（中論疏記卷三本、大正六・八一上）

○不空二諦者。即周顥義。引大品經云。不壞假名而說諸法實相。明諸法無自性故。所以是空。而自不無諸法假名。可以為有。故言不壞假名而說諸法實相也。山門等詔不空二諦。作鼠嘜栗義。只如鼠嘜栗內實盡空。外殼形有何異。假名故有。無實故空。故曰名著不空假名二諦也。（中論疏記卷三末、大正六五・九五下）

○山門等目名空有二諦。為案瓜二諦。明瓜沒之時。拳體併沒。瓜出之時。拳體併出。（出）時無沒。沒時無出。何異時空之時。無纖毫之有。明有之日。無毫之空。（同卷三末、大正

① (続) 同文存 (正統一、七四、一、二〇左下)

(肝) 卷五「案字釈名。真以實為義。俗以虛為義」（下冊三二丁左）

俗以虛為義」（下冊三二丁左）

② (続) 名

③ (続) 則

④ (続) 偽を加う。

⑤ (続) 也を加う。

⑥ (続) 欠

⑦ (続) 同文存 (正統一、七四、一、二〇左下)

⑧ (続) 同文存 (正統一、七四、一、二〇左下一二一右上)

二〇左下

⑨ (続) 則是

⑩ (続) 同文存 (正統一、七四、一、

二三左下)

⑪ (続) 虚

⑫ (続) 紋

⑬ この文以下統藏本には欠文なり。

卷第四 夢覺義

○^①一家相伝立夢覺義。（名教抄卷十二、大正七〇・八〇六中）

○問。夢覺之名。在聖在凡耶。答。夢覺之名。正在於凡。今借凡夢覺之名譬迷悟也。如夢中是有諸法。覺時都無。凡見有諸法。聖覺無所見也。（檢幽集卷五、大正七〇・四四六中）○第二釈名。亦有三種勢明之。一者當時釈名。夢是不了義。亦是迷濫失理為義。覺者了為義。亦是悟實得理為義。二者開發釈名。夢是覺為義。覺是夢為義。三者表理釈名。夢是不夢為義。覺是不覺為義也。（檢幽集卷七、大正七〇・四八七上）

卷第五 十地義

○理而論□十地以正法為體。故華嚴經云。從仏智慧海出生於十地。般若能生諸法。無住為本能生一切法等也。開之即境智為用。約用明體即智為體。空有兩智中。空智為主也。乃至海水本是一、因十山故十海名生。菩薩十地同一仏智。十障隔故十地名生也。（法門章卷二、日大、三論章疏一、六五一下——六五二上）

○對五種故。謂一對十行故。二對十障故。三對十法故。四對十果故。五對十譬故。（同、六五二上）

○（言十障者）一凡夫我相障。二邪行於衆生身等障。三暗相於聞思修三慧等說法忘障。四解法慢障。五身淨我慢障。六微煩惱習障。七細相習障。八於無相有行障。九不能善利益。十於諸法中不得自在障。（○（言十法者）初地中百法門。乃至第十地有無量不可數法門。如十地經中說也。○（言十果者）鐵輪王銅輪王銀輪王金輪王四天王。乃至作第六天王。如華嚴經說。○（言十譬者）如因地有十寶山。即譬十地。依一種列者。須彌山。雪山。少障

① この前に「一科四重明義」とす。

(山)。大障山。香山。宝山。黑山。金山。鉄匂山。大鉄匂也。(法門章卷二、日大、三論章疏一、六五三下—六五三上)

○一家作十障者。初地断凡夫我相。二地断衆生身邪行障。三地断無明暗相障。四地断解法慢障。五地断身淨我慢障。六地断微煩惱障。七地断微細集障。八地除無相有行障。九地断不能利益一切衆生障。十地断一切諸法不自在障也。○出相続解脱經。云断二十二愚心也。初地断二愚。乃至十地断二十愚。一地断二愚。則唯為十□。最後兩愚即等覺地所断。(同、六五三上一下)

○道種終心未離五怖畏。只猶計我氣未脫尽故怖畏。今初地既同真空無我。悉不見有我可得故。離五怖畏。名為真菩薩。(同、六五三下)

○一者善心地。謂布施持戒等善心地。二者聞慧地。三者思慧地。四者修慧地。此四種是欲界善心地。此三慧於三界分別之數而論次不同。數明欲界有聞思兩慧。色界有聞修二慧。無色界但修慧也。論意欲色二界具有三慧。無色界無有修故。成論三慧品云。欲色二界一切也。無色界中但有修慧也。五者有如定地。論四禪四無色定。六者無想定心□□論無想定不說滅盡定三地是凡夫定善心地故。七者聲聞地。八者緣覺地。九者□□地。十者十住地。十一者十行地。十二者捨小乘向大乘地。十三者大乘十廻向地。十四者十地。十五者佛地如來智慧德。十六者有余涅槃地。十七者無余涅槃地。二涅槃是□德。(同、六五四下—六五五上)

○汎論經^①与十信三十心十地名數出處不同也。今依華嚴瓔珞兩大經明之也。○次賢首品明實行之信。此兩品中明菩薩十信行心意。如集善根之行。(文義要第七、大正七〇・三一六中一下)

○第一明十信。亦名十癡心也。瓔珞經云。一信心。二念(心)。三精進心。四定心。五恵心。六不退心。七廻向心。八護心。九願心。十戒心也。○此十信行。一家判云。有一種十信。

^①(甲) 与論とす。

^②(甲) により加う。

一約仮用明十信。二就中仮明十信。即是正入菩薩位明十信也。仮十信者。如法華經第一卷云。為聲聞說四諦法。為緣覺說十二因緣。為菩薩說六波羅蜜乃至故一家相伝云。偏行六度即是仮用。明六波羅蜜亦得。是相善有所得行。○次三十心。花嚴瓔珞。初十位中十行後十廻向。仁王即此名十信十止十堅心也。(同、三一六下)

○(积瓔珞淨目天子。法才王子。舍利弗不能入七住云)今謂十住前得二諦空位中退也。又本業經云。退入外道起大邪見。及作五逆等。豈非初發心前具縛凡夫菩薩汎明之也。若得中仮十信位與三十心及初地已上。更造大邪見等無有是處。○今無得意。開則有六位。一學無得凡夫位乘。二仮十信位乘。三初發心中十信位乘。四相似乘位。即此心也。五從初地已上至金剛心真乘位。六仏果是果位乘。(文義要卷七、大正七〇・三一〇下―三二一上)

○一家自有頓漸悟義。藏師云。從凡入聖必是漸入。無有頓悟。而經云頓斷者。忬迹引接論之也。諸師多云。有頓漸悟義。隨人意提之。而大乘無所得宗意。忬如諸法師釈。但難明也。鈍根薄福學有相善比丘不信。

○故華嚴經云。初發心菩薩。即三世如來等。菩薩頭陀經云。前念出家後念成道。○直是最上利根菩薩^(①)。一了悟解。初發心時便成正覺。不由次第。等覺妙覺。前念為因後(念)^(②)為果。金剛聖體種智現前。涅槃城中証究竟果。○故知此菩薩無階差別十地也。○(引大品二十二云)一念相應慧。斷無量煩惱及習成仏乃至但諸仏為緣。漸頓方便開耳。(文義要卷七、大正七〇・三一五中一下)

○若無方仮論之。無柱不是者。故一微塵中有無量法。故一毛孔中有三千大千世界也。故花嚴經云。一中解無量。無量中解一。如是展轉生非真妄。智者無所畏。(檢幽集卷七、大正七〇・四八九下)

○二胡道人令入信。故好仮借天親菩薩名。安置^(③)已作論中。起信是虜魯人作。借馬鳴菩薩名。(文義要卷七、大正七〇・二二八下)

(4)(甲)信か

(3)(甲)住

(5)(文)卷七(大七〇・三三二中下)

(6)他処(大七〇・三三二中)にては、「吉藏」とす。

(7)(甲)大正脚注では菩薩を第とするも、等の誤か。

(8)(甲)により加う。

(9)(甲)也
(10)(甲)処

卷第六 仏性義

○三論^①一宗。得弁涅槃宗。徳王之文。（肝要抄卷五、下冊二六丁右）

○正法者。正因仏性也。（檢幽集卷七、大正七〇・四八七上）

○大經偈說本有今無本無今有。三世有法無有是處。釈偈者。本有者本有無量煩惱。今無者

今無大涅槃。言本無者本無煩惱。今有者今有大涅槃。是則若說煩惱為無。則說涅槃為有。

若說煩惱為有。則說涅槃為無。然此有無本非有無。故言三世有法無有是處。則本始是方便說無故。（檢幽集卷七、大正七〇・四八六上）

○今謂理外行心為外道。理內行心為內道。以扶理者為理內行心。乖理者為理外行心。（檢幽集卷一、大正七〇・三八九上）

○何但是衆生數有。^②依報草木亦有仏性。如華嚴^③云。善財童子礼弥勒樓觀。得爾許法門三昧。無量壽經云。寶樹說法。蓮華世界水寶樹皆能說法。故得云有仏性。是波若用故。（文義要卷六、大正七〇・二九九下）

○初地見始不見終。後身十地菩薩。見終不見始。仏則見始見終。（文義要卷十、大正七〇・三七五上）

卷第七 仏性義

○龍光伝開善。聖人陳言布教法門不同。大而經論不出三種。一頓教。二漸。三不言教。

（肝要抄卷二、中冊六丁左）

○一魯國師。立半滿兩教。吳國師。判頓漸偏三種教也。（文義要卷一、大正七〇・一〇〇下）

○頓教者。花嚴大集經等也。（肝要抄卷二、下冊七丁右）

① (続) 同文存(正統一、七四、一、

四九左下)「三論一家。得弁涅槃義

宗。故徳王文亦可是具論仏性……」

② (続) 同文存(正統一、七四、一、

五二左上)「同文存(同、五七右下)

③ (続) 同文存(同、五七左上)

④ (続) 非無

⑤ (続) 無定

⑥ (続) 同文存(同、五七八右上一下)

⑦ (続) 同文存(同、五八右上一下)

⑧ (続) 同文存(同、五七左上)

⑨ (続) 同文存(同、五七八右上一下)

⑩ (続) 同文存(同、五七八右上一下)

⑪ (続) 同文存(同、五七八右上一下)

⑫ (続) 海水

⑬ (続) 経を加う。

⑭ (続) 亦を加う。

⑮ (疏) 同文存(正統一、七四、一、

六〇右下)「同文存(同、五七左上)

⑯ (疏) 卷三(日大、三論章疏一、六

一四上)同文。

⑰ 本来卷七に収めらるべき仏性義の文は、現行本欠。

⑱ (文) 二一一下にも同文を引く。

(肝) 卷二(中冊六丁左)同文。

卷第八 五種菩提義

○增一阿含經第九卷云。善吉用法空悟道。中阿含經云。身子得空三昧。又転法輪經云。憍

陳如五人觀八苦無生也。仏成道七日。二世因果經云。仏逆順十二因緣空得道也。(肝要抄)

卷二 上冊二四丁右

○問。何故立四依。不列五三二依等。答。解不同。一旧云。對翻昔四依。故昔日今依法不依人等。故正立四依。今明。依人不依法故還而立四依。不列二三五等也。二云。諸仏菩薩應作多法。小乘法中只立四果。故還遂四果也。以弁四依位竟。(肝要抄卷一、上冊八丁右)

卷第九 二智義

○^①一從無量生。無量從一生。故言展轉生。一為無量故一非實。無量為一故無量非實。一無量非無量。無量一則非一。是則非一非無量。^②智者解了故無畏也。○^③地攝兩論等。一^④是真如一也。無量者二義。一理起性。万用無量。二於真如上起妄用也。論師云。一是真諦。無量是世諦。非一故也。今明。不一不多。而一而多。故一為多。多為一也。(檢幽集卷七、大正七〇・四八九下)

○^⑤一家云。雖言權實即是開波若。二諦^⑥且然。開一寒故。(檢幽集卷七、大正七〇・四九七上)

卷第十 成壞義

○第三藏律師名末田地。亦云末彈地。此云河中比丘。阿難欲入涅槃時。先令夜叉唱告。我和上今入水欲入涅槃也。諸阿羅漢聞唱告聲。不見阿難。並在河水坐。爾時阿難為末田地弟子。授與法寶藏。因處為目云河水比丘也。第四藏律師名舍那婆斯阿羅漢。或言彌婆私。此云綺衣。或云衲衣。此人常著麻綺衣。因事立名也。第五藏律師名優婆掘多。

或云鞠多。或云級多。或云屈多与及多也。漢云無相。或云大護。阿育王經云。此人身無三十二相。而能伏魔外道等。定功齊於仏。又有道術。以三尺瓔珞能伏外道魔等。時人呼為無相仏。（檢幽集卷五、大正七〇・四七〇下）

○第一明諸仏出世前後。復有二。第一明在世時造論。第二明仏滅度後造。仏在時造論有四人。第一大迦旃延。第二舍利弗。第三目連。第四比丘尼。明在已有人造論。即是大迦旃延造毘勒論。亦云毘勒論。^②^③^④釈注云秦為僕藏也。若入此法門論義則無窮。明諸法並是仮施設。故俱舍論引如仮施設說成論。亦云仮施設經中說。即是彼經論也。^⑤毘字論作毗。即同音也。（肝要抄卷二、上冊二〇丁右一左、文義要卷二、大正七〇・二二八中）

○第二舍利弗造論名法藏論。別時呼為舍利弗阿毘曇。有二十三卷。二十二卷云云。第三目連造論六卷阿毘曇也。第四曇摩陳那比丘尼亦造論。未釈其論。慮不此土也。故成論主弘云。曇摩陳那比丘尼造論。仏尚許之。寧不耻我造論也。曇摩陳那此云妙色。亦名半迦尸女。此從因緣得名也。（肝要抄卷二、上冊二〇丁左）

○有迦旃延尼子即大迦旃延兄也。子彼云尼。此女子從大外祖及母作名也。迦旃延子是三明六通大阿羅漢。自誓願五百仏所弘通無所得三藏教也。故婆沙序云。迦旃延子於五百仏所深種善根。願於釈迦造法。弘通無所得三藏教。故諸天道與六因義。（肝要抄卷二、上冊二二丁右）

○六十卷中。但釈前四度。初二十卷釈雜度。中二十卷釈使度。後十卷釈智度。十卷釈業門。余四十卷釈四度。不来此土也。（肝要抄卷二、上冊二二丁左）

○十八部論亦是諸阿羅漢所造也。（肝要抄卷四、下冊一〇丁右）^⑧

○什法師云。僧祇出九部。上座生十一部。漫陀山云。上座出十二部。此是近代胡僧所說。今以十一為定。（文義要卷二、大正七〇・二二五中）

○所言同世五師者。相伝釈之。一薩婆多部。二弥沙塞部。三曇無德部。四迦葉維部。五婆

① (肝) 卷二(上冊二〇丁右一左)、

(文) 卷二(大七〇・二二八中)、
(檢) 卷四(大七〇・四二六上)、

(鈔) 卷上(大七〇・五〇九中)の

四本照合す。

② 以上(肝)による。

③ 以下(文)による。

④ (檢) (鈔) 釈論註翻

⑤ (玄) 卷三(大七〇・五八四上)「俱

舍論……彼經論也同文。

⑥ (檢) 仮以下七字欠

⑦ (檢) により補う。

⑧ (疏) 卷二(日大、三論章疏一、六

(檢) 卷六(大七〇・四六七上)
(七上)

(鈔) 卷下(大七〇・五二三上)

(肝) 卷四(下冊八丁左)以上四本

も同文引用。

龜富羅部也。優婆掘多於八十誦中。簡繁存略留十誦律。有六十一卷。名為薩婆多。此云一切有。亦言三世有相。亦言一切言說也。弥沙塞。此云顛倒糺義。前解果後說因。亦名廣解。廣解篇聚也。所說三藏律部名為五分。有三十五卷也。曇無德。此云隱覆法相。亦云法鏡。招提云。此是古老諸師。反未知出何典告也。所出律名四分。有四十卷也。迦葉維。此云普逮。亦名輪煩惱。亦名普廣。亦云解衆生空。所說律名。相伝云亦名五分。不知幾卷也。婆龜富羅。此云依。大集經言著犢子。旧相伝云。翻為衆首。所說律名摩訶僧祇也。摩訶者如般若義中說也。但僧祇此云衆。亦言和合。亦名說也。所說律名大衆律。有三十卷也。（檢幽集卷六、大正七〇・四七二下）

○沒犢子出薩婆多更有異世五師。謂迦葉阿難等也。（文義要卷二、大正七〇・一二二五上）

○三百年中從薩婆多部又出一部。○亦名說經部。（肝要抄卷四、下冊一〇丁右）

○所諍事義雖多略出其要者。上座部自云。二世是有。見有成聖。仏是有為。雙林滅度。大衆盛說二世是無。見空悟道。仏是無為。雖般涅槃不般涅槃。上座親居僧之首。有所陳說不可埋沒。別銘一部。大衆亦是衆人同見。是不可抑沒。別名一部也。（檢幽集卷五、大正七〇・四五九上）

○什法師。分別論云仏滅度後一百一十年中。又增一阿含說仏滅度後一百一十年中。又求那跋摩云一百一十年中。善見毘婆沙說十八年中。雖復小小不同而大理是同。（檢幽集卷五、大正七〇・四五五上）

○四卷毘曇二百五十偈。法勝作。（即引伝曰）青目作長行。（文義要卷二、大正七〇・二二四中）

○阿毘曇等四諦實有為宗。但明人空未明法空。見有得道。故釈論中引毘曇義。聲聞不能証空也。（檢幽集卷三、大正七〇・四〇九上）

○何故不付菩薩。但付聲聞者。夫大士隨機濟物。形無定方。行無常准。唯有機必赴。不可強執一法。聲聞形有定規。行有常准。有出家形飾。邪正可分。是故四依法還依聲聞出

⑨（檢）卷三（大七〇・四〇八上）同文。

家儀。所以如來但付声聞也。（檢幽集卷五、大正七〇・四五四上）

○成論至仏滅度八百九十年。出世造論。名師子鎧。初則師子鎧事薩婆多部達摩沙門。究摩

羅陀弟子故。暢公序云究摩羅陀弟子。琳公序云鳩摩羅駄弟子。影公序云鳩摩羅和弟子。

同云學薩婆多部論主。（檢幽集卷三、大正七〇・四一七上）

○成實論具存天竺之正音。庵云闍那迦波樓侮優婆提舍也。闍那迦亦名毘留。此翻為成。波

樓侮亦名夜陀跋。翻為實。優婆提舍翻為論。問。得名云何。答。前出論師解不同。一仙

公招提炎公等云。實是體名。成是論用也。此論能成於實理。故稱成實論也。南彌仙師引

論色相品云。實名四諦。為成是法故造斯論也。問。若為成理故造論。何不就理弁成耶。

答。就文弁成有三義。何者。一文能成壞。尋造論之本欲成理故。所以造論。二文有興廢

故也。三文題名成實故也。瑛師云。今則具依仏命雙題文理。以文為成。言其能成四諦以

理為實。言其審諦不虛也。開善龍光云。通論成實論。實通文理。別則不爾。欲造論之意。

本為成理。非是成文。所以直就所成以說成實義。故論云實名四諦。為成是法故造斯論也。

今成與實是約理明之。但就理明成實義有異。實是理體。成則約用弁之。故論云欲造新實

論。新是成之別目也。何者。理始顯曰新也。究尋理體實無成壞。約教興廢義言成壞也。

十六文言銘成實論者。摹所成之實。以目能成之論也。（檢幽集卷五及卷三、大正七〇・四四

一中下及四一七下）

○問。汝成實論題名成實者。為當有所承安耶。答。論師等云。遠承金口非專輒自造也。何

者。增一阿含經第十一卷最初經解四諦竟。結言如是比丘有此四諦實有不虛。如來最初成此四諦。故名四諦。是故比丘当成四諦。此文証非自心題成實也。開善等相伝云。則此文亦証金口所授記也。又云大付法藏經所列。最後亦云師子鉗比丘。鉗是鎧之異名。即知詞

梨論師也。（檢幽集卷五、大正七〇・四四一中）

○問。經云是故比丘当成四諦者。健度四卷雜心婆沙等。皆是比丘所造。悉明四諦。何故得

(10) (肝) 主
(11) (肝) 以上同文引用。
(12) (檢) 卷三 (大七〇・四一七下) 卷

五 (同四四一中下)
(肝) 卷二 (上冊二五丁左) 以上三
文照合す。

(13) (肝) 婆
(14) (肝) 他
(15) 以上 (檢) 卷三による。

(16) 以上 (檢) 卷五

(17) 以下 (檢) 卷三による。

亦的屬訶梨論主耶。答。開善等旧云。犍度等論乃皆是比丘所造之論。悉明四諦。然彼論等題稱不名成実。唯斯一論獨稱成實。故知的允屬訶梨一人。今此兩經足可安信也。問。

經云當成四諦。何不名成諦論耶。答。並得。但旧云實名對虛。復欲示此理實有不虛。故稱成實也。今次第斥破之。經云當成四諦者有意義。一通論仏說四諦。於未來世無所得。小乘四諦須行。故言當成之語。何時言的囑汝。成實論主輒取此証金口所說。太不自知之。又成實論等是有所得。反覆仏說無所得。小乘宗何得當成耶。又罽賓小國之人。何時預記。又云。付法藏經云師子鎧比丘者論師。拏云即是師子鎧如前說。今故取彼經檢覈無有此語。故不可信也。又鉗是有孔也。箭何時是鎧之甲也。（檢幽集卷五、大正七〇・四四一下）

○論師釈論宗有二家義。一者法雲格法師。釈此論宗。雖弁四諦為宗。而四諦有二種。一方便仮名四諦。二正觀平等四諦。今此論正用平等四諦為宗。類如涅槃經。雖雙明因果而用果當其宗矣。今論亦爾。具明二種四諦。正用空平等四諦為其宗。故法師云。論主以四諦四等為本。言迹中不顯也。二者今諸大德並云。方便仮有四諦為論宗也。故阿含經雖明弥勒成仏記。而未說菩薩行故。今此經廣明菩薩行。故方便四諦為宗也。問。此論見四諦平等得道。何不以空平等四諦為宗耶。答。彼旧云。非無此義。但非三藏教竟。論主正申初教也。故論主造論大意。自明言正解三藏中實義。故正申初教。初教既以方便四諦為宗。故論宗還以方便四諦為宗。而論滅諦聚中云唯見一諦得道。此意破毘曇一枝義。非論之正宗也。略抄。（檢幽集卷四、大正七〇・四二一下）

○起信論。有云是北土地論師造也。而未知是非。○北諸論師云。非馬鳴造論。昔日地論師造論。借菩薩名目之。故尋不翻經論目錄中無有也。未知定是不。^⑯○婆沙六十卷伝來江左。見余四十卷於西涼州為兵火燒。出祐律師目錄也。^⑰高唱嵩法師云。更有余處請將去。故翻不竟。六十卷中但釈前四度。余四十卷不來此土。（文義要卷二、大正七〇・二二八下）

○今中觀論具存彼音。応云田地阿那羅優婆提舍。田地亦云地翻中。阿那羅此云觀。論如上

^⑯ (文) 卷二(大七〇・二二四上)「高唱……不竟」同文。

^⑰ (文) 卷二(大七〇・三二〇上) にも引用。

論。故名中觀論也。（檢幽卷集六、大正七〇・四七五上）

○今無識人或言三論是偏明破相空論也。故今明人法。人法兩明正顯究竟大乘論也。所言人正者竜樹是也。法正者波若正法也。問。此三証並計小乘顯勝。何必於大乘中為究竟而非偏空耶。答。偏空但是小乘。若於大乘本無淺深。何此論獨為淺。又於大乘中為淺者。是非余師難也。然今究竟無余之說者。總顯法深也。（檢幽卷五、大正七〇・四四二下）

○又中論觀行品云。大聖說空法為難諸見故。若復見有空。諸仏所不化也。大論釈大品經囑累品云。須菩提所得空。如毛孔之空。菩薩所得空。如十方之空也。大論第四十六卷云。諸摩訶衍中最大也。（檢幽卷五、大正七〇・四四二中）

○此意聞三論此兼於道。○聖人悟道亦無定。聞一諦即兼三諦悟解聞或。二諦與三諦即悟道。或聞俗諦即兼悟真。聞真即俗。有四句。（肝要抄卷二、上冊二五丁右一左）

○昔在什法師門下有三千門徒。得業之者只八子。即是八宿也。人人即作序嘆此論。今略拋叡法師一序。証究竟大乘論也。其序云。夫百梁之構興等。（檢幽卷五、大正七〇・四四二中）

○閻中伝記云云。長則融叡。小則生肇。中則倫影。成淵羅什八子也。（祖師傳集卷下、仏全、史伝一、一五五中）

○^①第①一論大乘緣起。羅什法師弘始三年十二月二十日來至長安。至四年正月五日翻經論也。傳云。弘始八年中滅度。有傳記之不定。今且一傳記之。肇師涅槃論云。什師門下十有二年。依此語未必八年中滅也。無依無得四論盛行於世。具如大聖遊意中說也。無珍得四論來江左亦有緣起。齊時有高麗國僧釈道朗法師。遊於黃竜諸國。八宿之子學弟子所聽學。得無依無得大乘法門。度江來至陽州。于時齊敬陵王學士。姓周名顥。即是周弘正之祖。與道朗法師周旋。即校其義宗。故周氏悟解大意。仍作四宗論。爾時不見其文。道朗師云。

^② 以上（文）卷二（大七〇・二九下）

（肝）卷三（中冊二八丁右）同文。

^③ （甲）許
（甲）破

^④ （祖）この一文を四論玄義第十三として引用するも卷十の誤りであろう。「三」あるいは「云」「曰」か。考註にて「底本草書甚難讀。讀者謬焉」とする。
^⑤ 僧の誤り。以下同。
^⑥ 所か
為か
揚の誤り。以下同。
竟か。以下同。

所造四宗論。言味可領。後恐是未善其意也。敬陵王請諸法師等五山寺豎義。周顥豎四論義宗。仍請道朗法師於彼寺通大乘義。五山寺者。即是今栖霞寺也。于時陽州諸大德有所得必如深深豎離汝都未敬信。如楚人。不別至右謂為猥言人耳也。周師請法師還草堂寺講說受學。無所得大乘已進悟解。謂天下無雙人也。周師既衰老己化也。朗法師既先。周氏往會稽山陰縣小時講說。後時齊嘯所職。後諸法師請法師復來攝山。攝山去揚州七十里。停山觀寺行道果。武天子登位欲學無所得大乘。請出揚州。然法師為人恒欲安居不欲出也。天子勅請十大德。令入攝山聽學大乘要道。朗法師諸出⁽⁸⁾。而法師為人淨居決不欲出也。十法師並是成論弟子。能穎悟聰明者。雖聰明而各各有師囑。致不輕後著小乘。執著不改都不信受。十人中九人雖後宣伝勅令聽學。一山講竟乃往杉樹山榔博戲矣。不專聽學。唯一莊嚴法師學士名詮法師。神悟大異諸人。專聽學得悟無依無得法門。道朗師知此得悟改常法師一一教授。得斯論義字旨。栖霞法師既得此法門。諸等知此人得大乘意旨。便景將未陳初治化之時。四方遊之士。仍入山京⁽⁹⁾論旨。諸法師雖聽習而學者如牛毛成者如牛角。

唯朗弁勇三師。出陽都講說弘通大乘無所得論。至今遍非無根本田籍也。大朗師論師不專講大涅槃經。直難處為諸人釁意而已。恒勸諸人欲得行道觀行品大品。是如大明鏡。常勸諸人。唯朗法師弁勇兩師。取山中師意。開講大涅槃經也。高麗朗法師初來揚州時。天子勅問。法師之講何經論。法師奉勅之講一切大經。仰問。能講花嚴經不。復答之最便如大乘義疏。正是無所得意也。天子大歡喜。即為作八卷疏也。于時如講師等講花嚴經。即得病不然則死。無有一人敢講說者也。天子復問。彼高麗國如法師聰明幾法師。答勅之推与一。道朗為第一人。道朗初授戒竟。往他借戒本。於行路開誦。至本寺道已誦竟。則還反送諸人。驚怖諸人。試誦即如水無有一句滯。故推道朗為第一聰明法師。為一日誦一卷。閑意得也。法不但聰明。復道德好形容。至白長大也。栖霞詮法師。欲⁽¹⁰⁾壽命之時運。知

心死即呼芳山大學士法朗法師。法師講花嚴經。諸事一一付屬。與興皇朗法師竟入涅槃也。

(7) 止の誤り。
(8) 請か

(9) 粿か
(10) 詮の誤り。

法師正欲捨壽時。地動大瑞現。如別伝記也。爾時揚州司星漏師即判之。北当攝山聖人捨壽。星天出顯也。梁武即夜駢馬訪問攝山。彼等諸德答。詮法師今繩床結跏。坐席如喫。面容如眠氣絕也。爾時山地大動也。国家人之二彼地動合時節。攝山動時与揚州地動。時漏刻合之。二處地動聖星出時。一一無有前後異。一時故。相伝驗知。詮師非凡人也。法師繩床結跏坐。葬入龜墓也。又興皇大師未出揚州講時。聖人志公時時走來興皇寺。向諸老僧云。此寺青衣芥出世弘大乘。諸僧相共語此。志公語底言說。爾時都不知也。梁末時。志公時時走來。向寺諸僧云。青衣芥出弘大乘。寺家須料理房舍。諸僧稱驚怖是何言也。陳天子登位。即勅令出於興皇寺講說。法師初出時。着青被袈裟講說。成就無依無得者非復一二也。法師正二十一年在興皇寺講說。學士初成者。慧二法師。次知寂知佈二法師。次拔明感三師。次亘哲持滿開腹寶修羅寶仲矩晶十四法師。最後成就惠衡惠覺吉藏三人。論之十七師。衡覺藏此三法師。陳正時未領人講說。陳滅後復諸講說大乘師。並還入長安。又在者不教講隱立山中。脫有者入惠日道場。衡覺藏三法師既年小法師。未入陳正時講說。法師限類猶在不講。後時覺師在新揚州講說。衡亦在光錫講說。藏公入東山蘇州。後入東州大盛講說。後亦入京也。興皇大師講說時有七百余。直地攝兩論成毘二家諸人。有七十許師。並領人講說者迦摩尼。伏聽學無依無得大乘。余親眼所見聞也。（祖師伝集卷下、仏全、史伝一、一五九下——六〇下）

卷第十一 開路義

○數論雖殊同明四諦。雖復同明四諦復有異処。若數人明四諦是實有。論人明四諦虛假有。四諦是實有故。所以見有得道。四諦是虛假有故。所以見空得道。○有是生死。空是涅槃。見有得道只見生死得道。○今更約中道實顯。就理研檢。汝數人云。見有得道。那得此有。道理之中若有此有。可言見有得道。道理之中無有此有。那得見有得道。（檢幽集卷三、大

(14) (13) (12)
慧布
慧
智
か
か
か

正七〇・四〇九上)

○今檢責三教五時有二意。一總檢經論責三教五時。總檢中得有三。一依經檢。二依論檢。三檢閔河相伝。今初經教有大小乘。初得道時說四含等經名為小乘。波若以上名為大乘。窮檢大小二經中無有出處。二依論。論有大乘小乘。仏滅度後三百年中。旃延子造八犍度。解仏小乘教。就此小乘論檢責五時三教。便無出處。次三百五十年馬鳴出世。五百三十年中龍樹出世。八百年中提婆出世。造諸大乘論。亦無此說。乃至千余年中法勝訶梨出世。造數論。復無出處。三者閔河相伝。安師以前乃至羅什至長安門徒三千。入室二十。長則叡等。小則肇等。如此龍象大得復無此說。豈非虛妄自称此義。故畢竟無有如汝說。出何經論也。(檢幽集卷四、大正七〇・四三〇上―中)

○汝若言花嚴前為諸大行菩薩。說因果之法明理具足故。如日初出前照山王。名為頓教者。三義不可。一者汝引經僻。日天子出時亦不前照山王次照平下。但山高前蒙日照。平下次被日光。此日天子曾無兩念。以此譬仏。明如來大悲平等布教無。但根緣取悟不同。若上根人早悟。下根之人後方得悟。譬事有異。那得輒引此文証頓教。所以不可。二者汝若言從淺至深名漸教者。華嚴亦從淺至深。初即薄地凡夫。次至十信外凡夫。次至內凡三十心。即是十住十行十廻向。次至真聖從十地後方至仏。從淺至深。豈復過此。若是華嚴是頓教者。五時亦是頓教。五時既是漸教。華嚴亦是漸教。三者明華嚴是舍那說。涅槃等釈迦說。此則法主異教門異住處異徒衆異。明得取舍那所說故為釈迦作頓教耶。又且問。華嚴教時了未有漸。那得有頓。此亦不可。○次彈頓教。若使初教是淺。從淺至深名漸教者。須問此初說四諦定淺為當定深。彼云決定是淺。既為下根人說。理當自淺。今難。若言四諦定淺者。此即不可。故大論云。說四諦時。六萬諸天悟於初果。得法眼淨。五比丘等悟阿羅漢。八千菩薩得無生法忍。皆住一生補處。若爾豈定淺也。若八千菩薩聞說四諦。住一生補處。而四諦是淺者。仏為補處菩薩說摩訶般若。亦應是淺。波若既是深。四諦亦應是深。

若言說四諦悟羅漢。而是淺者。說涅槃時亦悟羅漢。亦應是淺。何有此理。○次明涅槃若是深者。亦不可。何故。仏說涅槃。時引大品云。我昔於摩訶波若經中。說我無我無有一相。既說涅槃引大品成等者。故知大品不淺。涅槃不深。豈得言於五時中最深耶。○四諦是小乘。亦不然。故必一物於彼為妙。於此為麁。至論此物何閑妙麁耶。小乘亦爾。若聞四諦悟小乘果道。四諦是小。若聞四諦悟無生法忍道。四諦是大乘。何定大小。故涅槃云。或有服甘露傷命而早天。或有服甘露壽命得長存。有緣服毒生。有緣服毒死。甘之與毒起自二緣。四諦亦爾。大之與小起自二緣。豈得定判四諦是小也。○次斥論偏方不定教者。彼云金光明勝鬘。退不同漸教。進不同頓教。是隨緣宜名不定教。今所不爾。欲論不定盡皆不定。故如大品。或說智慧為般若。或說實相為波若。或言波若者不愚不智。或言波若觀苦無常相。或言色不生故名波若。亦如涅槃。前為香山諸仙拘尸力士說涅槃是苦無常。○問。破他五時三教。一無所留。今解若為。答。有兩意。一者破虛妄竟盡淨。我無別解。更有一積與汝何異。今只破不立與汝為異耳。二者汝識破不。若未識破。心更尋求。何勞問立。若已識破即無復有。何須別責。一切諸法皆如此破。若能了達盡淨虛妄。一毫不留。然後識方便之道。隨意得用。如此三教五時大小並今時隨緣方便。無大小中作大小說。無漸頓中作漸頓說。無半滿中作半滿說。一多亦爾。實相道中何曾大小。為赴緣故。不大小中作大小說。無半滿而說半滿。是以方便隨緣故悉皆得用。若偏執即成不可。（檢幽集卷四、大正七〇・四三〇中—四三一中）

○問。他立引經論。今亦引經論。若為有異。答。不相開有三節不同。一者他家大小異。大小異故小非大因。小既非大品。即不因小得大。本因小為大方便。小既異大小。即非大方便。若爾學小終不能趣大。今所用大小不二。若是他就大小中学大小故。大小成二。今就波若中学大小。波若無異故。大小即是不二。不二故大不異小。小不異大。何者於一仏乘今別說三。大那得異小。汝等所行是菩薩道。小那得異大。故此大小因緣假名。不大不小。

而說大小耳。二者他云三乘是權。所以須廢。一乘是實。所以須立。今明不爾。若使諸法之中有一乘道理。無三乘道理。可得廢三立一。而諸法實相中無二無一。既廢三亦廢一。若使立一亦應立三。豈得廢三而立一耶。今明。三之與一悉是方便。非但廢三亦須廢一。非三非一始是實相也。三者他云大乘是實所以表道。小乘非實故非表道。今明不爾。何意說小為欲顯非小。何意說大為欲顯非大。故說大說小表非大非小。所以大小並是假名。一往對他有此三節之異也。

○積五味相生。五味中波若是第四教。但此間人用波若是第三時。此即不可。今且難。經言波若是第四時。汝為第三時者。經云涅槃是第五時。應用為第三時。經云涅槃是第五時。而今不為第三時者。經云波若是第四時。那得制為第三時。故成不可。問。積五味與五時教成配既破不許。今解五味其相若為。答。且明五味之意。經何意作五味說。解。正為稱歎涅槃。譬如從牛出乳。展轉相生訖至醍醐。是為上味。涅槃亦爾。於諸經中最為殊勝。如歎經王各言第一。何闕說五味即配五時教耶。故成不可。今依真諦三藏解云。而言從仏出十二部經者。明十二部經即是言教音聲為體。明仏八音七弁說此名味句。故成論云。是法音声性。既能出如此名味句言教。所以道仏出十二部經也。次從十二部經出修多羅者。此言法本。法本只是法句。法句治衆生病之良藥。如嗔恚多者教慈悲觀。貪欲多者教不淨觀。愚癡多者教因緣觀。明十二部經只詮表此法本門。故言十二部經出修多羅也。次從修多羅出方等者。明方等即是行。既識治病之良藥。所以如法伏行。既其修於方等更導大行。故言從修多羅出方等。次從方等出波若者。在行既重。即能發生智慧。是故從方等出波若。智慧既生。即能斷除煩惱。得常樂我淨。故言從波若出涅槃也。三藏法師作如此解。極有意氣也。次今一師相承解云。明如來能出此言教。故道從仏出十二部經。十二部經抽出修多羅。修多羅猶自通慢。方等於中最勝。是故從修多羅出方等。方等之言猶自通慢。智慧於中最勝。是故從方等抽出智慧。故言方等出波若。波若即是不生不滅之因。能得大涅槃。

不斷不常之果。故言從波若出大涅槃也。若止觀法師云。仏教有四種。一者毘尼。二者波若。三者法華。四者涅槃。若他弁定三乘別教既是小乘。今明不爾。此乃於一仏乘分別說三。菩薩無生法忍。分別二乘之智斷。當知此三乘猶是大乘。那得言定小。雖有四教終不出因果二門。故波若與毘尼此即因。涅槃即名果。法華若為。解云。還攝在波若。何故爾。明波若則散說帶得。亦是法花東明菩薩行。雖復散束不同。同明菩薩行處不異。是故還攝波若。同是因果門。毘尼那得攝在波若。解云。此毘尼此乃一往攝於淺近根性。令其調伏身口七支。七支既淨即了無生。若了無生即是大乘故。經云毘尼學者即大乘。所以毘尼攝在波若。同為因位故。毘尼即是身戒。波若即是心慧。故身戒心慧二種莊嚴。若是興皇師云。有三教。爾時為五。講華嚴經云。初作此三教。一者根本教。二者方便教。三(者)帰宗教。根本教者即是花嚴。華嚴明正法之性非大非小。所以是根本。波若法華維摩思益等。此非大非小而能大小方便。故名方便教也。若是涅槃前雖方便說大說小。至涅槃教結還非大小。以是義故名帰宗教。仏教大意略如此。(檢幽集卷四、大正七〇・四三四中一四三五中)

四悉檀義

○問。三論朗師立四假義。釈經論意^①。何者。一就緣假者解不同。一云外人計有生有滅等相。今論主就生滅責覓生滅相。不得令其不立。名為就緣假。二云就緣假以凡聖相去遼遠。為欲化故同彼。就是同義將欲化前緣。且先同前緣。如四攝同利。故法花經譬喻品云。捨珍御服著垢膩衣。得近窮子。又如王宮生。一化始終隨入六道同之。為就緣假也。二隨緣假者。既同前緣之說。今欲化之故隨根性種種方便為其說。應聞有得悟即為說有。應聞空得悟即為說空。應非有非無悟。即為說非有非無。應聞三乘法即為說如三十三身化也。三對緣假者。對破也。前緣孰有將空對破。孰無亦爾。此是藥病對敵相破也。四因緣假者。是仏正因緣說。明一切法並賴因緣。如有不自有因不有故有。亦是有不自有因不有故有。如人

^①(肝)卷五(下冊二八丁左)論師

^②以上(肝)同文引用。

不自人因法故人等。但教言有所住。住則礙而不通。今因緣教言無所住。虛通無礙。故此第四名相成仮。則是大經如來隨自意說自在之也。此四仮義若了教之者。不須四仮。未得悟之者用之也。○三論師四悉檀與四仮結會。彼云世界悉檀即是就緣仮。各各為人悉檀是⁽⁴⁾隨緣仮。對治悉檀即是對緣仮。第一義悉檀即是因緣仮。通稱仮者用法雲師語。不自為義也。(檢幽集卷七、大正七〇・四八一下—四八二上)

十四音義

○此中十四音即是十四字。即喻昔偏教半字之說。後三十八字即喻今日圓教滿字之說。○又或以字義為譬。又復或以字名為譬。或以字形為譬也。字義如前解。是十四音名為字義者。用十四音喻昔半字。故云是十四音名曰字義。名曰半字之義也。字名者如十字。是語之尽。便取此尽處作義名。其中前語已盡後語復尽者。便以前者為小盡。後者為大究竟。此二盡之類是也。以字形為譬者。如半月者不足。如滿月者足。二種形之類也。涅槃經第八文字品云。吒者於闍浮提示現半身。而演說法。譬如半月。是故名吒。吒者法身具足。譬如滿月。是故名吒。(檢幽集卷四、大正七〇・四二八上—中)

卷第十二 三乘義

○菩薩者。^①具足存^②彼音者。^③經論所出不同。^④漸備經云。以為開士。^⑤無量壽經上卷云。十六正士。^⑥十住論亦云。^⑦菩提名上道。^⑧薩埵名深心。^⑨彼深樂菩提。故名菩提薩埵也。^⑩弥天道安法師折疑論。亦云開士。(檢幽集卷一、大正七〇・三八五上)

○人以仁慈為義。(檢幽集卷二、大正七〇・四〇六上)

(3) (肝) 卷五(下冊二八丁左)。「……因緣仮」同文

(4) (肝) 即是

(1) (統) 同文存(正統一、七四、一、八七右上)

(甲) 好

(統) 欠

(統) 所出二字欠

(統) 道を加う。

(統) 「……正士。即是十六菩薩數也」

(統) 「彼积云。報果菩提」

三宝義

○如來示生五宮。樹下成道。乃言在重昏之下朗然大悟。此為仏寶。為五比丘趣波羅捺。転四諦法。此乃為法寶。時有五羅漢。此為行法之人衆。則是僧寶也。（檢幽集卷五、大正七〇・四五八下）

○問。本勝迹劣。本劣迹勝。迹本俱勝。迹本俱劣四句。答。有。何者本勝迹劣可解。本劣迹勝者。如諸菩薩八相成道也。本迹俱勝者。二種皆仏也。二種皆劣者。本迹皆菩薩等也。（檢幽集卷三、大正七〇・四〇六上）

所収卷數不明

○故大品經釈論云。仏有二種身。一是父母生身。生身是相好仏。二法性身仏。即是常住仏。故經云。光明無量徒衆無量也。問。法性身仏。是（為）無常身仏為是常身仏耶。答。亦無常亦常。故大品經句義品云。一切種智有為也。亦如常住仏是常身。若至^①而論之常住。亦是無常仏。故中論涅槃品云。由無常放明常。若無常去常亦去。云何常耶。（文義要卷八、大正七〇・三四三上）

○龍樹菩薩造千部論。（檢幽集卷五、大正七〇・四四〇中）

○（經論能所義云）問。無所得宗明義。色等生世諦滅復是不生不滅。亦復得言真諦與真如。是不生不滅。復得言真如與真諦。是生是滅耶。答。無為法中差別明之。隨緣故說。即具通四句。非四論所引處。具如中論極意中說之也。（真如緣起、日大、三論章疏一、七六四下）

①（甲）主
②至とするも（甲）により改む。